

ことばをつなぐ、
学びにつなぐ

愛知淑徳大学
全学日本語教育部門
活動実施報告

Division of Japanese Literacy

2010-2013



ことばをつなぐ、
学びにつなぐ

愛知淑徳大学
全学日本語教育部門
活動実施報告

Division of Japanese Literacy

2010-2013

巻頭言

映画『たそがれ清兵衛』（2003年）に『論語』の素読をする長女カヤノが「学問したら何の役に立つんだろ」と呟く場面がある。清兵衛の答えはこうだ。「学問は針仕事のように役には立たねえかも。だども、学問しえば自分の頭で物を考えることができるようになる、考える力がつく。この先世の中どう変わっても、考える力もっていれば、何とかして生きてゆくことができる」。大学で学ぶことの意味を考える上で示唆的な言葉だ。

ところで、大学教育の現場は、学問の意味を考える以前の、より深刻な課題を抱えている。「大学生の学習意欲と学力低下に関する大学教員の意識についての調査研究」（『大学入試センター研究紀要』34、2005年）によれば、大学生において最も目立つ学力低下項目として「自主的、主体的に課題に取り組む意欲が低い」点が最上位にランクされ、「論理的に思考し、それを表現する力が弱い」、「日本語の基礎学力が低い」がこれに続く。「基礎的な読解力や文章表現力などを習得させることも重要」（中教審）と言われるが、それだけでは如何ともしがたい危機的状況が蔓延しつつある。本物の国語力・日本語力を身につけさせ、あるいはコミュニケーションツールとしての日本語を学ばせ、表現法・思考法のトレーニングを重ねない限り、社会に参画する力や、正常な人間関係を成立させる力は身につかないのではないか。最近の大学入学者はどのような日本語運用能力を身につけ、あるいは身につけていないかを確認した上で、初年次の学生が共通して身につけるべき読み書きの力を想定することが必要である。結論を先取りして言えば、論文・レポートの書き方（マニュアル）的な技術の獲得よりも、論理的な文章を批判的に読み（クリティカルリーディング）、考えたことを論理的に書く（ロジカルライティング）ための基本的、普遍的な方法の獲得こそが必要なのである。

2010年4月、愛知淑徳大学では、2004年度から文学部で試みてきた、読む・書く・話す・聞くという基礎的な力や論理的思考力を高めるための様々な実践とテキスト作成のノウハウを踏襲し、全学部必修科目「日本語表現 T1」（1年次前期）を開講。応用科目としての「日本語表現 T2」（1年次後期、文学部・メディアプロデュース学部は必修）、より実践的な発展科目「日本語表現 A（アカデミック）」「日本語表現 B（ビジネス）」「日本語表現 C（クリエイティブ）」も開講し、4年が経過した。日本語を体系的・段階的に学び、日本語運用能力を身につけることによって、より精確な言葉で「考え」、「理解し」、「表現する（伝える）」ことができるようになる。さらに、コミュニケーションを円滑に図る力、考える力を養い、ひいてはそれは、社会を生きる力にもつながっていく。本誌が、そうした力を育成するために、何が必要なかを考える^{よすが}縁となれば幸いである。

平成 26 年 3 月

全学日本語教育部門長

小 倉 齊

目次

	巻頭言	小倉 斉	2
I	開講科目および開講状況	外山敦子	5
II	授業報告	外山敦子 深津周太	11
III	テキストの発行	外山敦子	35
IV	学力測定	森本俊之	39
V	学修支援	外山敦子 櫛井亜依	45
VI	学修成果	畑恵里子	55
VII	F D 活動	櫛井亜依 外山敦子	63
VIII	学内連携事業	小倉 斉 外山敦子 入口 愛	73
IX	招聘講演・研究発表	外山敦子	91
X	広報	入口 愛 外山敦子	95
コラム	国文学科生の日本語表現科目履修状況に関する報告	中野謙一	34
	どうして言葉を学ぶ／学ばせるのか——その動機づけについて	永井聖剛	44
	「私だけ」が分かる文章から「みんな」が分かる文章へ	谷口純世	62
	日本語教育と学部専門教育の連携を深める ——学生の日本語能力向上へ向けて	大塚英揮	94

